

はしがき

『東アジア戦略概観』は、我が国唯一の国立の安全保障シンクタンクである防衛研究所が、冷戦後に周辺諸国との相互理解と信頼醸成に向けた当時の防衛庁の取り組みの一翼を担うべく刊行したものである。本書が、防衛研究所を代表する定期刊行物として定着し、刊行25年を迎えるに至ったのは、読者、専門家諸氏の励ましとご指導の賜物である。

刊行から25年の間に、「東アジア」の戦略的地理は拡大し、日本の安全保障課題も複雑化、多様化した。しかし、本書の内容が、研究者の立場からの独自の分析・記述であり、日本政府あるいは防衛省の見解を示すものではないという編集方針は、創刊当時と変わらない。近年は、執筆者の氏名および分析根拠を示す脚注を明示することにより、学術専門書としての性格をより明確にしている。

2020年は、新型コロナウイルス感染症の発生に明け、いまだ世界は感染拡大の封じ込めに成功していない。我々の生活を一変させた新型コロナウイルスが、安全保障環境にはどのような作用を及ぼすのか。このテーマを正面から扱う第1章（トピック章）では、新型コロナウイルスが米中の大国間競争から生じる「分断」を加速させている側面だけでなく、「多元化」の現象を分析する。そして太平洋や欧州における米中以外の諸国の役割に着目して「多元化」や「戦略的自律」の方向を提示する。続く第2章から第6章（地域章）では、米中の競争に対する各国の対応、新型コロナウイルスが内政や外交に与えたインパクトに留意しつつも、それにとどまらない2020年（1月から12月）の重要な事象を分析している。本年は、習近平政権の外交姿勢と軍事行動、脅しを強める北朝鮮との融和を模索する韓国、ASEAN諸国の感染症対応と南シナ海問題への対応、プーチン政権の憲法修正、米国の対中政策とバイデン政権の展望などが扱われている。また第7章（日本章）では、日米安全保障条約60周年の節目に当たり、その意義を振り返っている。

本書の執筆は、石原雄介・田中亮佑（第1章）、飯田将史（第2章）、渡邊

武（第3章）、松浦吉秀・富川英生（第4章）、長谷川雄之・坂口賀朗（第5章）、菊地茂雄（第6章）、塚本勝也（第7章）が担当した。また、編集作業は、助川康、増田雅之、栗田真広、押手順一、浅見明咲が担当した。

新型コロナウイルス感染症後の世界の動向をめぐる議論が始まる中、本書が、東アジアの戦略環境に対する関心と理解を深め、日本がよりよい安全保障環境を追求するための知的議論の材料となれば幸甚である。

令和3年（2021年）3月
防衛研究所 理論研究部長
『東アジア戦略概観2021』編集長
伊豆山真理